

教職支援室便り (9月号)

令和3年 9月10日 (金)

文責：教職支援室 曾我文敏

☎0985-20-4808

「教職特別講座」と教員採用選考試験

教員採用選考試験「第二次試験」については、例年8月下旬から9月下旬に行われますが、本年度も、すでに多くの自治体で実施されています。本学では、受験者全員（8名：小学校3名、中学校英語4名、高等学校英語1名）が第一次試験に合格し、第二次試験に進みました。

さて、「教職特別講座」もスタートして、もうすぐ1年になります。これまで、150コマ（1コマ90分）以上の演習の中で、学生の皆さんは、教員採用選考試験（筆記試験・面接試験等）に関する演習を多面的・多角的に行い、試験合格に向けて自己啓発を図りながら、教員になるための基本的な知識や技能等を習得するとともに、教員としての資質・能力を高めてきました。時には、壁にぶつかったり、くじけそうになったりしたこともあったことでしょう。しかし、それを乗り越えさせたものこそ、教員としての大切な資質・能力であると考えます。今後の教職生活においても、問題・課題を乗り越えさせるものになります。

また、私にとっても、「教職特別講座」等で学生の皆さんと共有した時間は、貴重な財産になっています。そのことを踏まえながら、今後も、「教職特別講座」や授業等を通して、更に充実した支援ができるよう、自己研鑽に励みたいと思います。

<第二次試験を終えての感想>

今回、二次試験を受けるにあたって、曾我先生に7月から対策をしていただきました。二次対策としてほぼ毎日、面接演習や模擬授業演習等を行いました。面接に関しては、最初は緊張して黙ったり、スムーズに回答できなかつたりしていましたが、回数を重ねるにつれ、受け答えができるようになったと思います。試験時には初めて聞かれる質問もありましたが、それまでの演習のおかげで冷静に答えることができました。

模擬授業も導入・展開・終末それぞれの流れを指導していただくなど、多くのことを学びました。特に、自分の中にもう一人の自分をつくり、模擬授業を行えるようになったことは、大きな成長だと感じています。おかげで本番でも、自信をもって模擬授業を行うことができました。

不安な時もありましたが、今はやりきることができてよかったと思います。そして、二次試験を受けるにあたり、特別講座で学ばせていただいて本当によかったと思います。二次対策というだけでなく、面接演習や模擬授業演習等で学んだ知識や技能は、実際の学校現場でも活用できるものであり、私自身の教師としての心構えや能力を向上させてくれたからです。この原点を忘れないように、演習の記録として作成したノートは、教員になった後も大切にしたいと思います。

応援してくださった方々、本当にありがとうございました。

卒業生からの便り

今年3月に卒業して教職に就いた皆さんは、教職1年目が進行中です。学校の1年を見通せない中での業務で、本当に大変な毎日かと思います。しかし、様々な問題・課題に直面する中で、教職に就いた喜びを感じることもあります。「教師になってよかった!」と感じる気持ちを大切にして、これから更に教師力を向上させてほしいと願います。

卒業生の便りを紹介します。

お久しぶりです。先生お元気ですか。

私は、4年生の担任になりました。学年は3クラスあって、ベテランの先生たちと一緒に働かせてもらっています。

4月6日に子どもたちと出会ってからの3か月、寝ている時以外は、頭の中が子どもたちのことでいっぱい、きつい日もあるけど幸せだなとも感じています。授業中の子どもたちの、「分かった!そういうことか!もっとやりたい!」という声が届みになって、授業準備も自分なりに頑張っています。

休み時間は、できるだけ子どもたちと遊んでいます。最近の学級の子どものブームはドッジボールです。一緒に汗をかいて遊んでいます。曾我先生が校長先生をされていた時に、子どもたちと校庭で遊んでいらっしゃる写真を、今でも覚えています。職員室で一息ついたり、丸つけしたりしたいところですが、「若い今のうちしかできないかもしれない!」と思って頑張っています。子どもたちも「一緒に遊んでくれる先生初めて!嬉しい」と言ってもらっています。

今日、初任研1回目(算数)でした。単元は角度の大きさでした。私自身あまり緊張せず、やれたのにびっくりしました。あとは、「教師が話すぎない」を意識して、子どもたちが一生懸命考えているところにヒントをすぐ出さないように、我慢して我慢して、なんとか45分終えました。子どもたちが緊張しながらも、張り切っている姿が、可愛かったです。課題もたくさんありますが、たくさんほめていただけました。すごく自信になったし、また明日から気持ちを入れ替えて、もっともっと頑張ろうと思いました。

初任者であることを言い訳にはさせない、しないと決めてやっています。

暑くなってきていますので、お体にお気をつけください。コロナが落ち着いたら、また会いに行きます。

「教職特別講座」で学んだことは、実際に教育現場で生かせること、「教職特別講座」は、採用試験に合格するためのものだけではなく、教職に就くための土台づくりであることなどに、触れている便りもあります。前頁の「二次試験を終えての感想」にもありましたが、学生の皆さんからの声は、担当者としてとてもありがたく思います。そして、本学の卒業生が、全国で、教員として活躍していることを、改めて誇りに思います。

さて、「夏季特別講座」も、いよいよ大詰めです。9月中旬には終了予定ですが、これまで学生の皆さんの、実に熱心な取組が見られました。大いに評価したいと思います。今度は、10月からの、3年生を対象とした「教職特別講座」の準備に入ります。

面接力・模擬授業力向上を目指す：その4

受験者の皆さんの重要な課題の一つに、面接力や模擬授業力の向上があげられます。そこで、6月号から、その課題解決のための資料を掲載しています。今回は、その4として、「模擬授業に臨む基本姿勢」、「模擬授業力向上の方策」等について紹介します。

1 模擬授業に臨む基本姿勢

面接官に与える、模擬授業中の印象が勝負を決める。

- 全体への視線、個々への視線に配慮する。
- 相手の目を見て話す。
- うなずいて聞く。
- 立つ位置を工夫する。
- 笑顔で応答する。
- 切れのよい返事をする。
- 発達段階に応じた話し方をする。

2 模擬授業力向上の方策

次の視点で、児童生徒への投げかけを演習する。

(1) 学習の主体者は、児童生徒であることを意識する。

- 「皆さんの考えには、驚きました。」
- 「皆さんの疑問を解決していきましょう。」
- 「皆さんの意見をまとめると、どのような【めあて（課題）】になりますか。」

(2) 問題意識や課題意識を喚起する。

- 「どのようなことが問題なのでしょう。」
- 「この問題を解決するには、どうしたらよいのでしょうか。」
- 「どのような方法で解決しますか。」

(3) 学習の見通しをもたせる。

- 「今日は、この【めあて（課題）】をもとに、学習を進めていきましょう。」
- 「今日の時間の終わりには、～についてまとめましょう。」
- 「次の時間は、～について学習します。」

(4) 思考するよう働きかける。

- 「ここが大切なところです。じっくり考えてください。」
- 「話し合っ、みんなの考えを練り上げてください。」
- 「とてもよい点に気付いていますよ。」

3 「模擬授業力」とは

子どもたちとのやりとりを

心から楽しんで

教師になりたい思いを

しっかりと感じさせる力

道徳の教科化に思う！（シリーズ52）

平成29年の6月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載しています。今回は、「教材・カーテンの向こう」に関する発問（構成）及び解説を掲載します。

1 教材名「カーテンの向こう」

2 出典「教科用図書」
教育出版

3 対象学年
中学校3年生

4 ねらい 内容項目 D-（22）「よりよく生きる喜び」

- 人には他者を羨んだり妬んだりする弱さがあることに触れながら、どんなに苦悩の中にあってもそれに耐え、他者の喜びを求める強さもあることを感得させ、「人間尊重の精神」をもち、よりよく生きていこうとする心情を育てる。

5 教材内容（概略）

イスラエルのとある病院の一室の話である。そこには、重症患者がベッドを並べて横たわっていた。彼らの唯一の楽しみは、病室に一つしかない窓に一番近いヤコブが、小さな隙間から見える、外の様子を楽しく話してくれることだった。それは、ヤコブの特権として皆が認めていた。ある日、特に重症だったニコルがベッドの交替を申し出たが、ヤコブはそれを無視する出来事がある。その日から、主人公「私」は、ヤコブの病気が重くなることを、ひそかに願うようになった。（主人公「私」は、ヤコブの次にその場所にいける順番でもあった。）その年の冬、ヤコブの息が絶えた。皆が悲しむ中、「私」は笑いが込み上げていた。そして、やっと窓際のベッドに行き、カーテンの隙間をのぞき込んだ。しかし、カーテンの向こうは、なんと冷たいレンガの壁だった。

6 発問（構成）

Q1. ヤコブがニコルの申し出を無視したとき、「私」はどんな気持ちだったでしょう。

Q2. ヤコブが息を引き取ったとき、「私」はどんな気持ちだったでしょう。

◇補助発問～そのような気持ちになることは、悲しいことではないですか。

Q3. カーテンの向こうが冷たいレンガの壁だと分かったとき、「私」はどんな気持ちだったでしょう。

◇補助発問～人は、ヤコブのようにそこまで強くなれるものなのでしょうか。

Q4. 「私」になって、改めてヤコブの気持ちを話し合しましょう。

◇補助発問～ニコルの申し出を無視したのは、どんな気持ちからだったのでしょうか。

◇補助発問～苦しい中で、外の様子を楽しく伝え続けさせたものは、何だったのでしょうか。

7 解説

内容項目D-（22）については、「人間としての強さ・気高さ」を学習する項目であり、小学校から積み上げられてきた道徳学習のまとめとも言えるものである。生命尊重、思いやり、誠実などの価値が、総体的にまとめられたものと解してよい。つまり、この中には、「人間尊重の精神」と「生命への畏敬の念」が、脈々と流れているということである。

指導に際しては、展開・前半の発問においては、「ヤコブを羨み妬む私」に共感させること、展開・後半の発問においては、「苦悩の中にも、他者の喜びを求めたヤコブを目の当たりにする私」の心情を、十分に捉えさせることが重要である。具体的には、次のような発問構成が考えられる。

展開・前半において、基本発問1「ヤコブがニコルの申し出を無視したとき、私はどんな気持ちだったでしょう。」、基本発問2「ヤコブが息を引き取ったとき、私はどんな気持ちだったでしょう。」は、ヤコブを羨み妬む「私」の気持ちへの共感度が、徐々に強くなっていく発問構成になっている。ここで留意することは、補助発問「(人の死に対して)そのような気持ちになることは、悲しいことではないですか。」に力点を置くことである。生徒にはあくまで、教材中の「私」の立場で語らせ、「ヤコブに対して、そのような気持ちをもつことはあるかもしれない。」などの反応を引き出すことが大切である。

展開・後半においては、苦悩の中にも、他者の喜びを求めるヤコブを目の当たりにする「私」の心情を、十分に捉えさせる基本発問3「カーテンの向こうが、冷たいレンガの壁だと分かったとき、私はどんな気持ちだったでしょう。」を発問することになる。ここで期待する生徒の反応については、特に留意したい。「ヤコブはすごい。ヤコブは優しい。」などの、ヤコブに対する「私」の気持ちを出させるだけではなく、「私はなんと愚かだったのか。どうしてあんな気持ちをもってしまったのか。」など、自分自身に対する生き方の自戒を出させることが、「私」に共感してきた生徒たちにとっては、心的影響があり、「ねらい」に迫ることができる。また、他の患者と「私」のヤコブへの見方の違いについても、見逃せない点がある。教材を読み込めば読み込むほど、ヤコブの励ましを素直に受け取っていた他の患者と、羨み妬んだ「私」の価値観の違いが伝わってくる。「みんなが悲しんだ。私もみんなと一緒に悲しい顔をしていた。しかし、どこかで笑っている自分がいた。」など、密かにそう思っている「私」がいる。もし「私」が「他の患者も同じようにヤコブのことを妬ましく思っていた。」と感じていたらどうか。このことは、教師の教材への思いにつながるものであり、発問等で表現しなくとも、それを踏まえて授業する場合と、踏まえないで授業する場合とでは、教師の表情やつぶやき、口調等が違って表れてくる。そして、「私の自戒」に係る生徒の反応を引き出すことが、意図的にできることとなる。また、補助発問「人はそこまで強くなれるものなのでしょうか。」は、生徒のこれからの生き方へとつながる大切な発問である。「ヤコブのようにはなれないけれど、これから少しでも、そんな生き方(心)に近づきたい。」など、思いを語り合う場面を期待する。